

鷗外雜感 内なる反逆の美学

木村 真佐幸

—

森鷗外の業績を評して、「テーベス百門の大都」と嗟嘆したのは周知の通り、木下幸太郎である。

たしかに鷗外は、今日の社会情況にみられるそれぞれの分野での専門化、細分化の世界では想像もつかない、いわゆる軍医官僚業務の他に、衛生学・医事評論・美学・美術評論・翻訳・戯曲・詩・短歌・小説・歴史学・社会思想等々、多面にわたって超一級の活躍をし、文字通りトータルバランスを内包した総合的知識人であった。

しかも、その諸作に底流する主題は、個と全体、私と公、自我と社会——これらの相剋と調和といった、いわば人間として生きるためには避けられない永遠に未完の主題に他ならない。そのような意味から、鷗外は軍部という権威主義的秩序体系に身を置きながらも、その権威に追従盲従することなく、常に客観的に対処してきた孤高の人であったと言える。

だが、世間には鷗外を秩序に生きる栄達保身の人という見方や、はなはだしくは権威の権化のごとく取沙汰する人もないわけではない。鷗外は「想世界」と「実世界」の矛盾を背負いながら、いわゆる体制から脱出しなかつた。視点を變えると、その体制の中で激しく葛藤していたからこそ権威構造のもつ虚偽や矛盾、時には民衆との力学対比を身をもって体験することができたのである。そして、それらは鷗外の足跡に生々しく刻まれているし、また歴史小説をはじめとして彼の多くの作品がこれを如実に物語っている。

鷗外の苦渋と辛酸の一例を示そう。

大正四年九月十六日の日記の項に、「婦女通信 予が引退の報を伝ふ。東京諸新聞の記者悉く来訪す」とある。これは何を意味するのか——。言うまでもなく、鷗外が明治四十年十一月以来、その任にあつた軍医總監・陸軍省医務局長職の更迭の事実を指す。鷗外の長男於菟氏の談に、「父の日記は淡々として、他人にわたる批判がましいところは一言半句も見当たらない……」とある。たしかに言い得ている。だが当時、鷗外の副官山田弘倫の言によれば、「予は復耳に水だ」と無然としていたと言う。当然であろう。軍医として最高の位置にいる鷗外が己れ

の更迭を知らない。のみならず、この事実を外部の人間、すなわち「婦女通信」の記者が知っていた。新聞記事ではじめて己れの置かれた状況を認識して愕然となった。ここには先に触れた権威主義的秩序体系——つまり、ピラミッド的に構成される官僚鷗外の姿や、あるいは自己保身に汲汲とするといった鷗外の容相はおよそ見当らない。

鷗外はなぜ、このようなへまをやったのか。鷗外は、人間の弱点も長所も知悉する、いわゆる自律的価値体系下に身を置く文学者でもあったからだ。人間は天使にも悪魔にも華麗に変身の可能性をもつ「取扱い注意品」であることをよく知っていた。

明治・大正の二大文豪と並称される漱石と鷗外——漱石には文学的後継者が多かったが、片や鷗外にはいわゆる直弟子はいない。いないというより作らなかつたといつた方が的確であろう。では、なぜ作らなかつたのか。これは一言でできる性質のものではないが、敢えて言うならば、鷗外は官僚機構の人間であつたといふことにある。つまり、官僚機構に身を置くが故に孤独に徹するという、いわば社会通念とはかなり距離懸隔のある対処の仕方を買いた。なぜ、孤独に徹し得たのか。それは幼少時からの忍耐という自己規制もさることながら、やはり文学活動、換言すると作品執筆を通してもう一人の自分との対峙が可能であつたことも視野に含んでおく必要がある。

たとえば、先にあげた軍医総監更迭記事の日に、鷗外はいわゆる「権威」についての三部作「最後の一句」を一気呵成に書き上げている。すなわち、大正四年九月十七日の日記に「最後の一句を草し畢る」。そして九月二十日「最後の一句を滝田哲太郎にわたす」とあるところから、この作品が太田南畝の「一話一言」等を種本に敷いたにせよ、先の更迭問題の憤懣やる方なき心情を一気に爆発させ、十六歳の小娘「いち」をして、「お上のことに間違ひはございますまいから……」と並み居る役人に一矢報いて狼狽させる——換言すると自己保身にうき身をやつす権威主義的秩序体系側の人間に対し、父親のために命を捧げるべく「いち」の自律的価値体系の激突……が鷗外の執筆モチーフであつたことに贅言を必要としないであろう。

ついでに触れると、鷗外は引きつづき「高瀬舟」を書き、その翌日には「寒山拾得」に筆を走らせ、「盲目の尊敬」の虚しさと、真の権威とは何かを衝いて三部作を完結させ、史伝へと移行していく。

鷗外は、権威機構の中に身を置くことを余儀なくしながら、常に真の権威とは何かについて疑問を捨てきれないでいた。きのうの人間がきょう軍服をぬいだとたん、そこにオートリテイが消滅するものなのか。人間の外形と内実は二律背反するものなのか。これは鷗外にとつて終生の課題の一つに他ならなかつた。先に触れた「想世界」と「実世界」の矛盾相剋をしたたか内に秘めながら、鷗外は内なる反逆を繰り返しながら苦闘をつづけざるを得なかつた。近代文学者の多くは、どちらかと言えば「実世界」からの逃亡者が多い。そして、この逃亡者の純潔な反俗一元の立場から見れば、鷗外のような二元世界に生きる者は一見、主体性喪失に映って我慢ができな

いことになる。だが、人間の真価は攻める時だけにあるのではない。否、むしろ守る時こそ真の価値が問われることになる。したがって、以上のような鷗外の韜晦的態度、内なる反逆を見究めない批判は片手落ちであり、正鵠をはずすことになる。

鷗外は六十一年の生涯の中で三たび遺言を認めた。いま、死の三日前に友人の賀古鶴所（かこつるど）に筆記させたものを取り上げ、この章の結びとしたい。

余ハ少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切秘密無ク交際シタル友ハ賀古鶴所君ナリコ、ニ死ニ臨ンテ賀古君ノ一筆ヲ煩ハス死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ奈何ナル官権（憲）威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス宮内省陸軍皆縁故アレドモ生死別ル、瞬間アラユル外形の取扱ヒヲ辞ス森林太郎トシテ死セントス墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス書ハ中村不折ニ依託シ宮内省陸軍ノ栄典ハ絶対ニ取りヤメヲ請フ手續ハソレゾレアルベシコレ唯一ノ友人ニ云ヒ残スモノニシテ何人ノ容喙ヲモ許サス

大正十一年七月六日

森 林太郎言

賀古鶴所 書

（かなづかい等原文のまま）

ためらいもなく長い全文紹介になったが、この遺言にこそ、人間鷗外の真情と、鷗外の内なる反逆が脈々と伝つてくることを訴えたかったに他ならない。

この遺言で主張する人間志向、いわゆるある種の権威への反抗と「官権威力」への絶対的拒否——ここにはすべての外形的虚飾をかなぐり捨てた人間森林太郎の実像と、文学者鷗外の本音がいかんなく示され、己れの人生を完結する真実の姿を垣間見て安堵する。

因みに鷗外の生地津和野と東京三鷹の禅林寺にある鷗外墓碑には、この遺言に従って「森林太郎墓」となっている。

二

もう一つの問題に触れよう。それは森鷗外の人と文学を考える上で避けられないのは、『舞姫』執筆のモチーフと「エリーゼ」来日、そして帰国にまつわる諸問題である。鷗外におけるこの青春の挫折と痛恨は、生涯、しがらみとなって鷗外の内面にわだかまり、重くのしかかることを余儀なくせざるを得なかった。

では、森鷗外にとって『舞姫』執筆動機は一体何んだったのか。

まず、作品構造面から見てもいくつかの疑問がある。第一に「舞姫」なる表題から読者は何を連想するか。作品のヒロイン「エリス」の描写からは、この日本的、王朝的典雅な風土性は想起し得ない。また、『浮雲』の言文一致に象徴される時の流れの中にあつて、ことさら擬古文と現在完了形という文体と作品構成。はたまた「天方伯」イコール「山県有朋」と想定できる人物造型。あるいは『舞姫』発表直後の明治二十三年(1890)一月十八日付の「読売新聞」に鷗外自ら「相沢謙吉」のペンネームで、「舞姫」は無類の拙作なることは申すまでもあらず、文章の上よりいふも語格の誤りなどすくなからず……」といった謙虚な姿勢が、その後、同二十五年七月の「美奈和集」では、「何れも優雅なる国文と雄渾なる漢文と精巧なる欧文脈とを融合調和して新文運を開拓せる名作……」。この「拙作」から「名作」への対極的距離懸隔、はたまた石橋忍月による『舞姫』批判への徹底的反駁。さらに鷗外の「独逸日記」には「エリス」おろか「エリーゼ」の名も全く見当らない事実。そして『舞姫』執筆後に外務省の井上馨を訪ねて就職運動と思ほしき行為……鷗外のドイツ留学に際しては明治天皇が鷗外に対し、直に声をかけ、帰国と同時に即軍医学校教官に任ぜられているだけにこの行為は不可解極まりない。

以上、いくつかの疑問点を列挙したに過ぎないが、ともかく従来説の一面とも言える「エリーゼ」来日問題の弁明と偽装?を全く否定するわけではないが、ただ、果たしてこれだけであろうか。

次に、上記の問題解明の前に『舞姫』評価の文学史的位置づけについて触れよう。

ところで、この評価の有りようは、今日、高校の教科書にも『舞姫』が約七〇%収録されているだけに重要である。まず、石橋忍月の「恋愛と功名の両立せざる後進国日本の精神風土の貧困」、さらに佐藤春夫のいう『舞姫』はテーマ小説である。要するに封建人が近代人となる精神の「変革史」であり、さらに「恐らく青年鷗外の内面的自我像」云々が今日まで底流していた評価であると言つてよい。これらは抽象概念としては正しい。だが、作家論を作品論へ照射する「邪道」を敢えてお許しいただき、作者の創作主体に迫る時、この執筆意図は結果論として了解しても、これら抽象思考のみで片づかない問題が内在しているのではなからうか。そこで「エリーゼ」来日問題と帰国という鷗外の青春の挫折に注目しよう。

鷗外の「うた日記」の中に、『扣鈕』なる詩がある。これは鷗外が日露戦争に軍医部長として出征し、明治三十七年(1904)五月二十七、二十八日の南山の激戦の折、ドイツ留学時代に「こがね髪」の「少女」から贈られたと思われるカフスボタンの片方が紛失したのを嘆いたものである。

南山の たたかひの日に

袖口の こがねのぼたん

ひとつおとしつ

その扣鈕 惜し

ベルリンの都大路の

ぼつさあじゆ^{注1} 電灯あをき

店にて買ひぬ

はたとせまへに

えぼれつと^{注2} かがやきし友

こがね髪 ゆらぎしの少女

はや老ひにけん

死にもやしけん

はたとせの 身のうきしずみ

よろこびも かなしびも知る

袖のぼたんよ

かたはとなりぬ

ますらの^{注3} 玉と砕けし

ももちたり^{注4} それも惜しけど

こも惜し扣鈕

身に添ふ扣鈕

注1 / Passage 歩道 (仏)

注2 / epaulette 肩章 (仏)

注3 / 益荒男・丈夫・武人

注4 / 百千人

文学は言うまでもなくフィクションである。だが、この『扣鈕』の詩に表象される作者鷗外の痛恨を素通りしてよいのであろうか。批判を覚悟で言うならば、やはり「エリーゼ」問題に対する心の痛手を看過できないのではないか。

ところで、鷗外はこの「エリーゼ」との「人生行路」については、社会的手続を整えている。まず、今日、東京千駄木の鷗外記念図書館（鷗外旧居、観潮楼跡）に保存されているモノグラムは何を意味するのか——。当時のドイツの中流以上の家庭では、婚約もしくは結婚の時、女性の側から男性に贈る習慣があったそうだ。中心部に大きく刻まれる「M」、そしてその上部と周辺に配されるR・Mはまぎれもなく林太郎・森のイニシアルである。

第二に、当時、軍人が外国の女性と結婚する時は上官の許可が必要であった。これはおそらく幹部は軍の機密を握っているとかどで、機密漏洩防止にねらいがあったろう。ところで、この点についても、鷗外と時を同じくドイツに滞在し、帰国を共にした直属の上司である石黒忠憲軍医監の日記の一文がこれを裏付ける。すなわち、明治二十一年七月二十七日の項に、「今、多木子曰其情人ブレメンヨリ独乙船ニテ本邦ニ赴キタリ……」。多木子とは、文字通り「森林太郎」の謂であり、「エリーゼ」をして船一便遅くらせての渡日指示もおそらく日本の軍医部、森家の混乱を避けるための石黒の配慮と想像するに吝ではない。

では、以上のような社会的手続が一応整っていたのに、なぜ、この愛は挫折を結果したのか。作家星新一氏の手による『祖父・小金井良精の記』（良精は鷗外の妹喜美子の夫）によると、「エリーゼ」来日から帰国決定まで大もめにもめたことが裏づけられ、小金井喜美子の『森鷗外の系族』（昭和十八年刊）に基づく「エリス」を「路頭の花」という視点や、「すなおな帰国」という「神話」は崩壊し、ひいてはこれをベースにした『舞姫』成立論は怪しくなる。当時、ヨーロッパから日本への船旅は約四十日、船賃にして七百二十円、今日、これの一万倍と仮定しても七百二十万円、しかも「エリーゼ」の宿泊ホテルは築地の「西洋軒」で一流である。一方、鷗外の一年間の滞在費は一千円。したがって「エリーゼ」の来日は伊達や酔狂での行為では絶対ない。

ところで、この「エリーゼ」を追いかえすことに同意を余儀なくした鷗外への非難は喧しい。鷗外をしての自我の喪失、主体性欠如、意志薄弱、優柔不断、母「峰子」への追従主義等々……考えるに、この非難は正鵠を得ているのであろうか。もちろん、一人の女性を犠牲にしてよいものではない。だが「家」のため、「国家」のため、そして何よりも肉親の絆をはじめとし周囲の人々への心配り……時に日本の近代化の外形的兆しがようやく整いつつある明治二十一年で現代ではない。鷗外にとってこの二者択一は、まさしく強靱な忍耐と卓抜な意思、そして冷静な判断が要求されたはずである。

ここで再び『舞姫』執筆のモチーフに視線を移してみる。超極論と乱暴な想定を省みず言うならば、鷗外は『舞姫』発表により文壇人志向を……その反作用として軍部、官僚忌避という重大にして、かつ危険なカケを敢えてやっつてのけようとしたと考えられないか。このように見えてくると冒頭で問題提起した幾つかの疑問や、異常とも言える『舞姫』擁護の姿勢に納得がいく。当時、鷗外が置かれた状況の中で『舞姫』発表はどのような波紋を惹き起すか。これはいわゆる小説であってフィクションは自明のことながら、世情は政治小説に汚染されて文化

的風土の貧困は避くべくもない。現に鷗外の妹小金井喜美子が、「ちらちら同僚などの噂にのぼるので、ご自分からさっぱりと打ち明けたお積りでしよう」（『森於菟へ』1936・6）という発想や、「この近代的、人間的な自我の目ざめと、それに反する非近代的、非人間的な偽善の行為という矛盾を鷗外はいわばこのヨーロッパ的な近代性や人間性と日本的な封建性や官僚性を巧みに使いわけていった有能な知識人であったということになる。」（桑島昌一「鷗外と舞姫」について）といった批判、いや非難さえある。文学者鷗外批判は自由である。だが、『舞姫』について文学以前の視点での評価は困惑せざるを得ない。

以上、諸々の視点から見て来たように、鷗外にとつての『舞姫』執筆、そして発表は、将来を保障された栄達の道の崩壊という危険性も内在していただけに鷗外としても逡巡は決して少なくなかったはずだ。だが、鷗外は敢えてこれを発表した。これこそ、「エリーゼ」に対する逆説的な愛の体現であり、佐藤春夫の言う「明治十七年、若い陸軍二等軍医として戦陣医学と衛生学との研究のためにドイツに渡った鷗外森林太郎の洋行の事実を近代日本文学の紀元にしたいと思う。」（『近代日本文学の展望』）に裏打ちされた内実の伴う決断であったとさえ言えよう。

結果的には鷗外の必死の努力によって『舞姫』は文壇的にも評価を受け、一方、軍医部内の地位は揺曳しつつも一応、沈潜化することとなった。そして、やがて「目不醒草」や逍遙との「没理想論争」などに象徴される戦鬪的啓蒙時代を迎えることになるのである。

（一九八九・三・一五）